

|| 直言 ||

求められる「農業士」の役割発揮

ことし7月26日、平成28年度近畿ブロック農業士地域研究会が和歌山県みなべ町で開催され、それに参加する機会があった。この研究会は毎年、近畿の各府県が持ち回りで開催し、本年度は和歌山県が当番県であった。研究会の主催は、和歌山県農業士会連絡協議会と近畿ブロック農業士連絡協議会で、開催趣旨は「これからの地域農業の振興と活力あるむらづくり、担い手の育成などの課題について意見交換を行い、農業士としての活動を助長し、今後の農業の発展に資する」というもので、総勢200名が参加した。

農業士とは、通称「指導農業士」とも呼ばれ、府県によっては農業経営士、農業士、普及指導協力員、農の匠など呼称は様々である。農林水産省ホームページによれば、指導農業士とは知事が認定するもので、各地域で青年農業者の育成・指導に取り組む農業者とされている。具体的には、「農業高校や農業大学校の実習生、就農に意欲のある者や新規就農者を指導農業士宅に受け入れての農業経営研修、既に就農して活躍している若い農業者に対しての助言などを行っており」、農業・農村の活性化・発展に指導農業士が大きな役割を果たしていることが評価されている。

そもそも農業士制度発足の先駆けは長野県（1967年）とされているが、各府県レベルの農業士会の設置年をみると、1969年の静岡県を皮切りに、最近では高知県で2002年に設置されているが、その多くが1970年代半ばである。このような設置が相次ぐ1970年代に、農業士は「農業に対する姿勢と青少年育成促進のための称号であって、メリットはない」と指摘されるなかで、全国農業士研究会では組織討議（1977年度～79年度）を重ね、「農業士の役割」をつぎの4項目にわたって集約した。すなわち、①自らの経営を安定確立し後継者の指標となる、②青少年を積極的に家庭内に受け入れ指導する、③在村青少年の育成に協力し良き相談相手となる、④地域農業の振興に貢献する、ことである（全国農村青少年教育振興会30周年記念誌『農村青少年育成三十年の歩み』1994年）。日本の農業・農村の実情に即してとりまとめられているといえる。その後、1984年には全国団体である「全国指導農業士連絡協議会」が設立される。現在、同連絡協議会には44道府県が加盟し、全国の指導農業士は約1万人を数える。

和歌山県の農業士には、指導農業士、地域農業士、青年農業士という3区分がある。指導農業士は「優良な経営を行う地域のリーダー、後進の指導的役割を果たす65歳まで」、

和歌山大学 食農総合研究所所長・経済学部教授

大西 敏夫



地域農業士は「地域の中核となる担い手で60歳まで」、青年農業士は「将来、地域の中核的な担い手となる若手で40歳まで」となっている。本県の農業士制度は1976年からスタートしており、2015年4月現在、指導農業士が161名（うち女性27名）、地域農業士が561名（同63名）、青年農業士が152名（同2名）で、トータルでは874名である。本県の認定者数は、府県レベルでは愛知県に次いで多い。

本年度の研究会は、主に2つの柱で実施された。前段が農林水産省国際部国際経済課・国際専門官による講演「TPPについて」、後段がパネルディスカッション「これからの農業を考える」である。

筆者がコーディネイト役を担ったパネルディスカッションでは、前段に講演した農林水産省の国際専門官に加え、近畿府県の農業士会の各代表・6人がパネリストとなり、それぞれ自家の経営展開をふまえながら、「これからの農業はどうなるのか」、「どのような農業をめざすのか」、「農業後継者育成のポイントは何か」などについてそれぞれ意見を述べた。パネリストは、法人経営が3人、個人経営（家族経営）が3人で、経営類型別では、米単一経営が1人、「野菜+米」や「茶+米」の複合経営が4人、「柑橘+ウメ」の果樹複合経営が1人である。パネリストらの作物構成は、畜産を除き米、野菜、果実など近畿農業の特色を反映している。

各パネリストの発言では、指導農業士ゆえに、自家の農業経営では自信をもって実践していること、消費者との連携を強めていること、海外への事業展開をめざしていること、農業後継者や新規参入者（社員）を確保するなど経営継承・事業継承を進めていることなどが意見表明された。その一方で、「これからの農業はどうなるのか」では、「中山間地域が多く、現状のままでは担い手不足により荒廃が進んでいる」、「高齢化・後継者不足で耕作放棄地が増加する」、「やる気のある者となない者の差が広がるなかで放任園が増え、産地は縮小してしまう」など、パネリストらの足下（地元）では、地域が大きく揺らいでいる実態が明らかにされた。

パネリストらは、農業経営者としての自信と誇りをもちつつも、地域農業の先行きには大きな不安を抱いている。「地域で農業士の役割が発揮される決め手（政策）は何か」「現場の実情に本気で農政は応えているのか」と、自問しながらディスカッションを終えた。